



若者の未来のためにできること

東京大学名誉教授

養老 孟司 (ようろう たけし)

養老でございます。大阪は久しぶりで、京都は7年くらい毎年、月一回いっています。実は京都国際マンガミュージアム館長になっていましたので。なんか大阪って違うという感じがいたします。常識が少し違うとか、これはあまりきちんと意識されてないですね、日本の中でも。たとえば大阪弁で、「自分」といいますね。「自分、リンゴきらいやろ?」とか。関東では絶対にいわない。日本にないかという、考えてみると昔からある。関東では喧嘩の時とか乱暴な言葉として「てめえ」。あれはもともと「手前ども」ということばです。侍が「おのれ」といいます。「おのれ」は自分のことで、へその曲がった子どもかもしれません、「なんでおのれといって怒ってるんだろう。自分のことを怒っているんじゃないのか」と。根本には日本の文化、日本語のもとにあることには違いないので、このへんが生きているところが、大阪の面白いところかなと思います。

今日は「若者の未来に残す」という話なんですが、大阪で一度経験があるのは、東大に勤めていた頃、20年以上前ですが、大阪にきてホテルに泊まって暇なもんですから道頓堀に出かけて盛り場どうなっているんだろうと、日曜日、ちょっと見に行きました。若い人がたくさんいる。驚いたんです。東京でも原宿とかいけばいるんですけど、若い人の年齢が揃っていて、ほとんど若い人だったので、次の日に大阪の人に「どうして若い人、あそこに集まっているの?」と聞いたら、「うちにいると年寄りがいて煩いからじゃないですか」。若い人の未来に何を残すか。この歳になると死ぬことを考えますので、年寄りがいなくなるのが一番簡単だと。これは何か残すのではなく、邪魔しないという意味で。以前からそう思っています。

大阪が元気がないというのも聞いたことがあります。これも20年以上前から聞くことがあって、一体何が元気がないのか。経済のことはほとんど理解できないので。ところが2010年に藻谷浩介さんが『デフレの正体』を書かれたんですね。経済はわからないといいましたが、私どもにもわかる話で、きちんとデータを出して日本の社会の、それでいわれたからです。それまでの経済の話は大抵欧米が基準になっていまして世界が基準になっている。典型的なのはGDPということばはアルファベットですから日本の概念じゃありません。それが藻谷さんは極めてわかりやすく、15~65歳の生産労働人口の変移について書いています。厚生労働省のいう労働生産人口についての本が出された2010年、10年以上前から全国都道府県で、生産労働人口がひたすら減っている、年に10万人単位で減っているというレポートがありました。それで「ひょっとしたら、それか?」ということを考えてんですが、ほんとかどうかわかりません。お年寄りが増えちゃうので、ある意味で元気がなくなる。

最近、藻谷さんに聞いたら、大阪は年齢別人口構成が20年前の鳥取県と同じだと。広島と大阪は20年前の鳥取県と同じ。20年前の鳥取県がどういわれていたか。多分、片山さんが知事になってから何とかしなきゃという時代だったんだろうと思います。高齢化が進んでいると。今日のタイトルが、かなり大阪らしいというか。人口というのは急に増やそうとしても増やせるものではないので、割合に安定した統計になります。人が入ってくれば別ですが、人の移動ですから、増える、増えないでいえば、大阪は相当、人が減っているという予想がつきます。

今年になって元岩手県知事だった増田寛也さんが中公新書で『地方消滅』という本を書かれまして、別に地方がなくなるわけではなく、地方自治体がなくなる。町の人口が減ってしまうということであれば、自治体としては存続できなくなるので、なくなるといってもいい。地方消滅は地方自治体の消滅、これもデータで示している。2010年の総人口、各市町村の総人口と2040年の総人口、もう一つ若い女性、子どもを産むことができる年齢の女性の数と比率。これをざらんにすると大体、地方の町の予測ができるということです。それをあちこち回つたびに、面白いから見えていきますが、島根県に10年以上いっていますが、島根県のトップにくるのが津和野ですね。津和野は8割方、減ってしまう感じです。8割減ると消滅といった方がいいかもしれません。津和野は古い町で、どうしてそうなのかなと素人なりに考えますと、古い町ですから、町の中心はしっかりと古いものが残っている。そこに問題があるのではないかと。多くの古い町でドーナツ化現象、中心部から寂れていく。これはそこの代替わりが、

うまくいっていない。店を閉めた、後の人が入ってこない。東京では場所によってはありますが、現役時代、東京で目立っていたのが、私の感覚ではホテルニュージャパン、赤坂の一等地に焼け焦げのホテルがそのまま残った状態で10年以上続いていた。横井英樹さんがもっていたので、いろいろ問題があって、そのままになっていた。それを見るたびに思ったのですが、ああいうところにそういうものを晒しておくのは問題があって、あれは何とかするのが自治体の仕事ではないかと思っていました。それに同じとはいいいませんが、近いことが古い町の中心部で起こりやすいのではないか。古いところは規制の権利があるので、そこに人がずっと居続けて新しく転用することが難しい。商店街を転用することは典型だと思いますが、金沢でも一時、ずっとシャッター街になっていました。商業がだめだといわれたんですが、それだけかなと疑いをもっていました。

そもそもこういう時代、人口が減っていく、急速に高齢化する時代は初めてでございます。少なくとも明治以降、日本人の人口は対数曲線で増えています。急激に増えますので増えるのがあたりまえで100年以上やってきた。それがここにきて完全に時代が変わったという感じです。それはかなり前からそうじゃないかなと思っていました。私は昭和12年生まれで小学校2年で終戦ですから覚えてます。終戦で日本が変わったことはおわかりで納得される。その後、次にきた大きな節目は日時は特定できないんですが、現在ではないかという気がします。漠然と幅をもっていますが。何が起きているか。若い人が相対的に減ってお年寄りが相対的に増えている。この状態が2040年頃まで続きます。京大元総長の地震学者の尾池和夫さんの意見では2038年が東南海地震だと。室戸岬の動き方で、そういう推定ができる。2040年あたりが問題の一つの節目になるかなと。それにあわせて2040年の地方消滅のデータが出ているんですね。偶然、地震と、ほぼ重なる時期になっております。そのくらいだったら現在の状況から人口の推定ができるわけですから、それで時代が変わってきているのではないかなと、かなり私も強く感じるところです。若い人に何を残すかというよりも、年配の方が増えた。多くの方は介護とか問題にされるんですが、それは後ろ向きというか、30、40年すればなくなる問題で、そうではなくて、それ以外の問題を考えたら、何がどうなるか。

最近、『日本の国宝を守る』（講談社新書）が出ました。著書はデービッド・アトキンソンというイギリス人で日本に25年おまして、もともとはゴールドマンサックスの経済アナリストでした。バブルの頃から日本にいて今は小西美術工藝という古い文化財の修理をする会社の社長です。アトキンソンの本から二つ面白い点をご紹介しますと、一つはそういう会社ですから何をするか。日光陽明門の漆を塗り直す。漆が主です。会社は漆職人をたくさん抱えています。彼が社長になってまず気づいたことは日本の国宝級の古いものを修繕しているのに使っている漆が100%中国産だということで、怒りまして、これを全部、国産に変える。今、漆を植えるところから始めてみたいんです。もう一つはこういう業界は後継者がいない。これもあたりまえのようになっています。後継者がいないからどうしたか。職人さんを集めて話をした。「こういう状態だからこのうち何人かリストラして若い人を雇うか、全員の年俸を下げるしかない。考えろ」と言い渡したところが、75%が年俸を返上した。その人には高校生くらいの若い人を二人つけた。「今は、うまくいっていますよ」と。年配の職人さんも若い人に自分の技術を伝えようと。自分の身銭を切っているから熱意が出ます。その時に思ったのは、重要なのは歳の差ですね。おそらく70代の職人さんが高校出となると孫の世代になります。以前はこれほど長生きしませんでしたので、統計で見ますと遺産相続の平均年齢は60代といわれています。驚くべきことで68歳で遺産もらってもしょうがないだろうと。親御さんが歳をとるだけでなく、子どもさんの世代が歳をとっていますので、代替わりが難しくなっているのではないかな。伝統的なものについては代替わりはやわらかく考えて、今、孫の教育費を税金で免除していますが、その手で家業を孫の世代に譲ると、ずいぶん違うのではないかな。子どもはどうする。孫からみれば同じ扱いですね。おじいちゃん、おばあちゃんの方が対立が少ない。父と子は世界中で、少なくともツルゲーネフの小説になるほど昔から問題のテーマですから、それは一丁、飛ばして孫までもっていってしまうと、比較的やりやすいところがあるのではないかな。ある程度、合意して、皆さんの常識としてやってみたら、いくらか違うんじゃないかと。

個人の技術で成り立つような典型的なものは一次産業ではないかな。農業もそうです。農業も子ども世代に譲ろうとすると都会に出て別の仕事についている。おじいちゃんとおばあちゃんがやっている。農業は高齢化していると、よくいわれます。不利な仕事かということ、そんなことはない。部外者ですから外から見ていると、いろんなことが気になります。人口構成でいうと農村地帯は高齢化しているはず。その人口構成をみると津和野町の中で若い人が入っている。人口構成がちゃんとなりたっている。このままでいけば将来も人が減らないという地区が、ちゃんとあるんですね。左證地区。どうしてそういうところがあるのかと見ると、どだい、人数が少ないから子ど

も連れの夫婦が帰ってくると、あっという間に変わるんですが、でも新しい人が入ってくる場所は同じ過疎、高齢化の島根県津和野町のなんと一番不便なところ。そういうところが日本の中に例外的にいくつかあります。島根県の隠岐の海士町もそうですが、ここは変わった高校をつくりまして、全国から生徒を集めていまして、人口構成が若がえています。高校生がいるからではなく、卒業してからも、居つく人が出ている。滋賀県の朽木、もとも村ですから山奥というイメージです。その中でも若い人が入っていくところの中でも辺鄙なところ。す。

結論。なんとなくおわかりいただけるのではないですか。若い人が入っていく理由は多分、年寄りがいないからですね。結局、新しく飛び込んでいく時はうっとうしいのはいやですから、若い人が都会に出た、かつての我々の時代、都会にどんどん出ていきました。田舎はうっとうしい、人間関係が面倒くさいということがあったんです。今の人も同じように感じるだろうと。そういう過疎地の不便なところに行くとも年配の人がいないから、過疎地が日本のフロンティアに変わっていつているのではないかと考えています。10年以上前に「限界集落」が問題になりました。70歳以上の人だけで集落が構成されている。典型として上げられているのが岡山県です。岡山県は当時、限界集落は700を超えると。東京の新聞記者がコメントを書くと日本の悲劇みたいを書く。70代以上の人だけで村が構成されている。私は、へそ曲がりですから70代以上の人だけで維持されている集落が700を超えるということは、岡山県がいかに住みやすいところかを示しているのではないかと思いました。いくら子どもが親不孝でも70代だけの人がいる田舎の集落にいて、具合が悪ければ、子どもが手伝うなり、引き取るなりするでしょう。それをしないで年寄りがしゃんとしてやっている。私も70代終わりで喜寿でも結構元気に動けますから、そういう人たちだけでやっていけるということは暮らしやすい。そういうお年寄りが、ある意味で既得権をとっていいところをとっていますから、若い人は入りづらいのではないかな。これが孫の代なら比較的移りやすいだろうという気がします。こんなに年配の人が増えている時代はないんですね。今年も2万人後半の人が100歳になりました。このままですと一番多い時は100歳以上の方が全体で40万人を超えるといわれています。世界の記録で最長寿はフランスの女性で122歳まで生きました。ひょっとすると日本人がその記録を更新するのではないかなと思っていて、122歳という2回、還暦がきますから。2回目の還暦はないわけじゃない。このばあさん、117歳で禁煙した。健康のためではないんですよ、手の動きが悪くなって、自分でタバコの火をつけられなくなったので、介護の人に気をつけてタバコをやめた。世界で最長寿の方は喫煙者だったということですけど。おそらく2040年までの間に日本人がその記録を更新するかもしれないと思っています。

そういう時代は歴史上ないので、我々が世界の最先端を走っている。中国が20年遅れで日本の状況を追いかけています。中国だけではなく、ベトナムにせよ、タイにせよ、アジアの国は多くは日本の後を追います。日本は大抵は大陸の世界にいいものがあって、それを追っかけるという考え方をしてきたと思いますが、大分前から、それはできない。何だか知らないけど日本が最先端になってしまっている。韓国とか中国のナショナリズムを見てみずと戦前の日本みたいな感じが私はするんですね。とうの昔に済んだよと。年齢構成だけを見ても、根が理科系ですからデータのある話でないといけない。藻谷さんの本を読んだ時に初めて日本の社会を日本のデータで説明する人が出た。デフレをそれだけで説明するのは乱暴かなと思いますが、労働生産人口が減ったという一言で説明するのは。ですが、経済は複雑な側面がありますが、それが基本にあるのは、多分間違いないだろうと。お年寄りは特にお金を使うわけではない。これから新しい事業を始めようとする人もいない。そうなるとなんとなく、昔風の、人口が右肩上がりの時代からみれば元気がないように見えるのではないかな。ひょっとすると大阪がそうだったかもしれないなと、結局、町全体が歳をとってきた。それが根本にあるうかと。

もうちょっと今、起きている変化の話。一つは労働生産人口が減っていく。さらに総人口が減っていく。若年女性が減って人口の再生産が落ちる。もう一つ大きな変化が、水野和夫さん、この方は霞が関の官僚だった人ですが、経済の本で、データつきというよりも、あたりまえのことですからなるほどと思うんですが、『資本主義の終焉と歴史の危機』、資本主義は終わったと。マルクシズム批判でもない。単純で、わかりやすい。銀行にお金を預けても利息がつかない。それです。資本があっても利潤を生まなくなる時代になった。おそらく世界中、先進国はそういう傾向になってきていると思います。日本が特に先頭を走っています。それは銀行は鵜の目鷹の目ではないですが、投資して実体経済やっていますから、それから利益が上がる投資をして上がった利益の一部をもらうわけですから、その銀行がお金を預かっても預けた人に利息が払えないほど儲からないのは、お金がいくらあっても儲かる場所がないことを意味します。水野さんはそれが「資本主義の終わりだ」と。いつ頃から利息がつかなくなったんだろうかと、この間、床屋さんの親父と話をしている「覚えている？」と聞いたら「2004年、20年前に店を動か

そうとお金を用意した。銀行と相談して、当時、5年定期でお金を預けたら6.8%、利息がつきます」といわれた。20年前は十分利息がついたんですよ。10年で倍になるように。今は利息はつきません。水野さんは歴史上、利息がつかなかった時代、場所があるかと歴史から調べています。ちゃんとそういう時代があった。それば17世紀のイタリアです。17世紀のイタリアは大航海時代の後、植民地から大量の金銀がヨーロッパの金融の中心になっている。大量の金銀が流れこんだ。だけどその投資先がない。どうなったか。山のてっぺんまでぶどう畑、イタリアは投資するとしたらワインしかなくて、山のてっぺんまでぶどう畑と書いてありました。今、世界が、そうなんです。アメリカですと子どもの頃は西部劇がありました。ノスタルジー。広い未開の土地があった。西部がなくなっただのがアメリカのある種の終わりではないですか。そこでストップがかかって、その後、宇宙に出ていこうとしますね。必ず外に探していく。その後、具体的に成功したのはITです。しかしあつという間に飽和しています。新しいフロンティアがなくなると利息がつかなくなる。これが世界の傾向だとすると世界全体が今や江戸時代になった。日本の江戸時代ですね。

さらに東北のバス会社社長の富山和彦さんが『なぜローカル経済から日本は蘇るか』という本を書いています。それを読んでびっくりしたんですが、ローカルとグローバルですね、対立しているのは、こっちをローカルとすると、こっちがグローバル、この本はある意味では非常によく理解できた。なぜかというと、私の場合は研究者で出発しました。理科系の研究者は価値観は完全にグローバルなんですね。つまり『ネイチャー』とか『サイエンス』の一流の科学雑誌に論文を出して最終的にはノーベル賞受賞が上がりなんですよ。新聞も書いている。ノーベル賞の時期になると大きな活字で出ます。だけどお考えいただきたいのは、私は解剖学をやってきましたけど、解剖学会は会員が2000人足らずいるんですが、その中でノーベル賞をもらう人が何人いるか。0ですね。そういうグローバルな価値観から見ると、普通の解剖学者は何をしているんだという話になります。意味ないでしょう、極端にいうと。私は教授になるまでは業績が必要ですから英語で論文を書いて、外国の雑誌に載って評価してもらう。仕方がないからやるわけですが、教授になると、その必要がありません。何もしなくても当時は一応、クビにならないようになっていました。実は論文の形式そのものが欧米の基準で、と最初から決まっています。それ以外はノーです。英語で書くと英語でものを考えないと書けません。日本語で書いて英語に訳すのは邪道です。どうしてもうまくいかない。それをやった論文はたくさんあります。読むと、すぐわかる。日本人が書いた英語の論文だということがすぐにわかります。英語で頭から考えると限られたことしかできません。一つの論文を書くのに数倍の手間がかかります。やめたと。日本語で書くことに決めました。それをやるとグローバルの軸、Y軸から見るとX軸、ローカル軸で起こる出来事は全部0なんです。全く無視です。縦軸から見れば横軸の点はどこからみても0です。富山さんはバス会社の社長です。「グローバルとローカルは法則が違う」とちゃんと書いてある。価値観が違うと法則が違うんです。

アメリカの企業のCEOとかトップのノウハウ本がパソコンに広告が出てくる。面白いですよ。会社のために考えたらだめだと。そういうことを考えるのはいいようだけど、だめだと。法則が違う、グローバルとローカルは。富山さんはGDPに対する上場企業の比率をいう。周りの素人に「知っている？」と聞いてみると、ほとんどの方が知りませんね。30%、雇用で2割。だけど新聞を読む限り、日本の経済はほとんど上場企業で動いていると錯覚していました。しかしローカル経済が7割を占めている。そういわれてみて日常払っているお金を誰に払っているか。立派な会社に払っているか。さっきの床屋さんもローカル。今週、いやというほど歯を治してもらって高い金を払いました。歯医者に入ったお金もローカルです。この話がよくわかったのは、私は科学の世界で研究者だった頃、グローバル基準に反抗したからです。これをほとんど30年以上続けてローカルで一応成功したとっていいと思います。私の本はこれ以上売れないという部数までいった。多くの方が私の本を「英語にして売ったらどうですか？」と必ずいう。売れません。やる前からわかっています。もし英語で売りたいなら、はじめから英語で考えます。富山さんのいう通りで、ローカルとグローバルは法則が違うからです。これは甘くみると失敗します。

ローカルとグローバルの始まりはどこからか。明治維新からやっています。明治になって開国したわけですから。尊皇派と佐幕派が喧嘩したのはご存じのとおりです。あとはもっぱら開国になって、開国になったということはグローバル基準でいこうということですね。その時は富国強兵ですから2本の柱、経済と軍事は昭和20年8月15日まで続いたわけで、実はその中心は軍事でございます。どうしてそんなことを乱暴にいえるか。こんな経験があるんです。私は昭和12年11月11日生まれです。昭和12年7月7日に蘆溝橋事件が起こっています。中国の本土を対象に戦争が始まった。私の生まれた年から。学生さんがある時、「誕生日のお祝いです」といって昭和12年11

月11日の新聞のコピーをもってきてくれました。裏表2ページしかありません。面白いから何を書いてあるか読みました。2ページしかない新聞の表と裏。すべてが当時の中国での戦況、戦いの報告です。徐州の何とか村で何々部隊がどうこうと書いてあります。一番驚いたのは火事も喧嘩も殺人も自殺も何もありません、他に。その途端に氷解したことがあります。なるほどと思ったのは、よく戦後、「日本軍国主義」ということばがありまして、我々も若い時しょっちゅう聞いてきたんですが、日本軍国主義の正体は実は、これだと。つまり神田神保町にいて日本軍国主義を鼓吹しているというか、書いた本があるかと探しても、一つもない。限られた紙面でできていた新聞のすべてを当時の中国での戦闘記事で覆ってしまえば、皆さん方の結論、読者の結論は、ただいま現在、中国での戦闘以外に重要なものはないという暗黙の結論になるでしょう、毎日それをやられていけば。それは皆さんがご自分でつくった意見ですから、自分の意見くらい変えにくいものはありません。新聞が「ただいま現在、中国で行われている戦闘以外重要なものはない」と、むきつけに書いたら多分、疑われると思います。「自分の商売の方がもっと大事だよ」となる。そこを書かないところがミソであって、紙面全体を戦闘記事で埋めてしまうことが、皆さんに与える影響を、計算はしてないと思う、でも暗黙のうちに計算した。それが戦前の軍国主義だった。

戦後はどうなったか。軍事が落ちて経済になったと思います。今出ている、いくつかの本をみていきますと、アトキンソンさんはイギリス人ですから先程の本の中に何を書いているか。彼は「日本もイギリスと同じ島国だから輸出がないと経済は成り立たない国だろうと思っていた」と。GDPに対する日本の輸出は何%を占めるか。調べたら驚きましたよと。17%。なんで驚くかということ、ヨーロッパですとドイツは42%です、輸出が。近所の国で韓国は6、7割いっているのではないのでしょうか。そういうことを我々は読みませんでした。何を読んできたか。日本は経済中心で動いていって資源がないから輸入が大切だと。確かに大切で、石油が切れちゃうと。輸入しないと。だけどそれ以外ではアトキンソンの結論ですが、結構、日本は自前でやっていける。富山さんも同じ数字を書いています。そういうことを知らないできたのは多分、戦前の軍事と同じで、暗黙のうちに自分で結論を出して「それ以上重要なものはない」としているのではないか。明治維新以降、敗戦で一つの軍事が落ちた、グローバル基準で世界の強国、5大国といていましたから。軍事で競りあっていたのが、今度は経済で競りあいましたが、これもどうやら人が少なくなって、世界の経済そのものが、資本主義が成り立たない状態までいきますと、ここも平たくなる。時代が変わったと申し上げたんですが、時代が変わったことは明治以降の歴史をみても、この100年で、ここが最後の段階で、明治の富国強兵から軍事と経済の両方とも消えたのではないかという気がいたします。

この経過を「近代日本」といつてきたんですが、それもどうやら終わったらしい。人口は見事なもので、ほんとに明治維新からこう上がるんですね。今はこう下がっています。完全に対数曲線です。我々が「近代日本」といつているのはおそらくの間です。これは特殊な時代だったという結論です。あとはどうなるか。江戸に戻るんでしょうね。それは暗い時代かということ、そうではないという意見が大分、前からありますね。江戸というのは大阪は特にそうじゃないですか。管理職である侍がほとんどいなくて、もともと戦国時代から自治の伝統のあるところですが、自分でやっていける世界になる。どっちかということ、そう思った方がいい、そう思うべきではないか。挙国一致で経済にせよ、「これ以上に大切なものはない」という価値観でやってきた時代が、やっと終わりになった。これから自分で考える時代になる。考えるだけでなく、実行する。

たとえばグローバルでやるか、ローカルでやるか、科学の世界のように分かれているものはなくて、ローカルでやったら科学ではないと見なされる。私と同年でグローバルでやってきた人の事例をあげると利根川進さんです。アメリカにいてスイスの研究所にいて、最後はノーベル賞をもらって、今、理研にいますけど。全く同年です。人の話を聞いている時にその方の価値観がどっちの方かということはチェックするようにしています。どっちか。だって両方違うんですから。実は両方折り合わせる方法はたった一つしかない。私の本を英語にすることが、グローバルにすることではない。どうすればいいの。必ず物事はそうですが、基礎に戻るしかないでしょうと申し上げます。私の好きなことばを申し上げますと、イタリアの諺がありまして「どん底に落ちたら？」という大抵の方が「あとは上がるだけ」といわれるんですが、イタリア人はそういいません。「どんどこに落ちたら掘れ」といいます。「基礎に戻れ」と。とことん基礎に戻れば同じです。人間どこにいようが。誤解があるといけないので、グローバルとローカルの対立の話を申し上げました。

もう一つは個人の問題です。歳をとって最後に死ぬということになります。個人のレベルで考えて大分前から考えるようになりましたが、商売が解剖でしたから、亡くなった方ばかり見ていたので「俺もいずれこうなる」と感覚的にわかっています。この歳になると、2、3日前、寝坊してしまって10時頃まで寝ていたら、女房が心配して

上がってきて「死んでるかと思った」と。うっかり寝坊すると死んだと思われる歳になりました。いつ死んでもおかしくない。そうやって考えた瞬間にハタと、大阪まで電車を乗り継いできて、タクシーで途中で交通事故を起こして死んでしまうと私は困るか？　すぐわかるんですが、いつ死んでも私は困りません。死んだ途端に私がいなくなりますからいっさい困らない。困るのはロータリーですよ。幹事の方が「どうするんだ、この時間」と。それはお気づきですよ、皆さん。皆さん実はその意味では「他人のために生きている」んですよ。確かに今の社会では「自分の人生」というんですね。若い人。自分らしさとか。最近、『自分の壁』という本を書いたんですが、そんなものどうでもよろしいと。昆虫が好きで小学生の時からずっと虫をいじってまして、今日もこれが終わると4日間、仕事がないので虫をいじってられるので、うれしくてしょうがないんですけど。これは私の時間であって皆さんと何の関係もない。そんなこと、皆さん方にとっては、あってもなくても同じですね。私自身が私自身の時間を過ごしているのは。そうやって切り離していいわけで、私が自分で好きなことをやって、世の中のことは知ったことかと思っている、その間は。それは私の人生かもしれませんが、それは外しちゃってもいい。皆さん方が毎日寝ている、グーグー寝ている時間と同じで、寝ている時間は必要だと。必要に決まっていますけど、それは勘定に入っていない。寝ている時間と好きなことをしている時間は自分の人生から外していいなと。外すしかないんですよ、皆さんに関係ないから。それを逆に考えると人間、生きているのは「世のため、人のため」、あたりまえの結論が出てくる。「自分のために生きている」と思っている人がいるかもしれないが、寝ているのは自分のため、確かに。しょうがないじゃないですか。社会的な活動は「世のため、人のため」だろうと。どうしてそんなことをわざわざいうのか。

実は昭和20年8月15日以降、逆の傾向が暗黙のうちに強くなってきたような気がするわけです。だから時々、特攻隊の遺書を見て、10代後半の若い人たちが命を失うのがわかりきっているのに、なぜ志願して出ていったか。身近な人のため、家族のため、将来の子どもたちのためと書いています。お国のためとか、天皇陛下万歳と書いているわけではない。それでももうピンとくると思いますが、かつてはそうであった。それが今はなくて、それが行き過ぎたために、戦後は暗黙のうちに逆に変えたんでしょうね。ああやって公のため、一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ず。滅私奉公の方針でしたから。いくらなんでもひどいよ、と人生引っくり返してみたら「人生自分のため」と、いつのまにか。戦前の軍事以上に大切なことはないというメタメッセージと同じように、「人生は自分のもの」というメタメッセージがずっと暗黙のうちに広がってきたと思われませんか？　大阪はまだ、いいかもしれませんが、東京なんか、そうじゃないかなと。これがへんなところにあちこちに出てくる。

「人生自分のもの」と思うと奇妙なことが起こる。50代の自殺が多い。それだけでなく小学生が自殺するようになりました。私が若い頃、学童期は自殺しないといわれていたんですが、最近はしますね。その裏にあるのは「自分の命を自分で左右していい。命は自分のもの」という考えが出てきた。教えているわけではない。教科書に書いてあるわけではなく、親がそう教えているわけではないけども、メタメッセージとして、そうなっている、暗黙のうちに。週刊誌を見ると去年、週刊朝日の対談に出ました。最新号をくれますから見る。表紙に「脳卒中にならない食事」というタイトル。僕は聞くわけです。「どうしてこういう特集をするの?」「いやこれを出すと売れるんですよ。実は3回目です」と。「脳卒中にならない食事」。こういうふうに食事を変えていけば脳卒中にならないで済むと書いてあるな、とお考えになる。私はへそ曲がりですから、「脳卒中になるか、ならないか、病気になるかならないかは、その人の心得だ。考え方次第、やり方次第だ」と。もっといくと「死ぬか死なないかはその人の考え方次第だ」と。寿命はそうやって延ばせるか、私、実はそう思っていない。人間、いつ死ぬかわかったもんじゃありません。これは「運」だと思っている。医者がそういうことをいっちゃいけませんから私は患者さんみません。亡くなった方だけみています。どうみてもこれは「運」というしかない。

去年、ラオスにいきましたが、ラオスのウェン・ジャンという首都からサムヌアという北の町に飛びました。17人乗りのデハビランド・ツイン・オッターという愛称の飛行機で。日本でも使っていました。これでいって降りて昼間、宿に荷物を置いて夕方宿に戻りました。親父さんがニヤニヤ出てきて「お前ら運がいいな」。何がいいか。テレビでニュースがやっていて、私が乗っていった飛行機が帰りに飛び上がった瞬間に突風にあおられて谷底に落ちて、バラバラになったんです。行きと帰りの差です。私が乗ったのが最後のご奉公だった、飛行機の。その愛称が「ツイン・オッター」、双子ですね。カワウンです。日本では使われてなかった。なぜかという。「遂に落ちた」に聞こえるんですよ（笑）。やっぱり落ちました。2月にはマレー半島にいったんですが、4月にボルネオにいきました、マレーシア航空で。最初にいった時はマレー半島にいった後、インド洋でマレーシア航空の飛行機が

行方不明になりました。次に4月、ボルネオにいて、しばらくたってウクライナで撃墜されました。そういうことはいつあるか、わからないので、自分がいつあたるかわからない。私は宝くじ買いません。おわかりでしょうか。宝くじの確率は低いです。飛行機に乗ります。落ちる可能性低いからです。宝くじ買って飛行機に乗る人は相当、強欲だというしかないんですね。そんな生き方をしていますので。

でもちょっと気になるのは、若い人は「自分の人生、自分のもの」と思っちゃう。それを考えてやっていけば、意識的に「人生をコントロールできる」という考え方が暗黙に広がっていることが「自分の人生、自分のもの」となる。病気もそうです。皆さん、病気すると自分が病気するんだと思いませんか。でも皆さんが病気になった時、本気で困ってジタバタする人は誰かとお考えになったら、つれあいでしょう。私、医学部を出ましたけど、まず医者にはいかないんですね。なんでいかないのか。現役の時に医学部に勤めていました。東大に10学部ありまして、国家公務員ですから必ず健診を受ける義務があります。10学部の中で医学部の健診を受ける率が一番悪いんですよ、4割です。やっている本人がいかないんだから「あんなもの役に立たない」とわかっている。病院も基本的にいかない。最近、アメリカで健診を受けるグループと受けないグループのどっちが長生きか。ちゃんと調べていますよ。同じです。もっとひどいのは「フィンランド症候群」といのがありまして、フィンランドで管理職の人100人を2グループに分けて片方は医者が徹底的に健康管理した中年すぎの人たち。もう片方は好き放題、勝手にしろ。10年観察して結果をみました。ちゃんと有意の差があり、ほっておいた方が長生きだし、健康にいいんですね。「フィンランド症候群」というんですが、順天堂大学の奥村教授が日本語訳をつけてこういうふうに訳しました。『「不良」長寿のすすめ』、あまりいうと真面目な人は怒るんですが、昨日、近藤誠先生と対談してまして、医者のお話ではなく、猫と犬の話で、私は猫を飼っていて近藤さんは犬を飼っている。あの方は「ガンと戦うな」という方で、一切医療はいらないのか。違いますよ。私が若かった時と比べて進んだ医療は、たとえば外傷、怪我。これは昔だったら死ぬ人がずいぶん助かっている。昔だったら後遺症が残るものが残りません。医学が進んでいることは間違いない。「健診にいかないよ、医者にはいかないよ」というと「どうしてか?」と質問されますから、「俺が教えた学生なんか信用できるか」といってるんです（笑）。自分のことはわかっている。

命をどう考えるかということも相当変わってきてしまった。今の人は自分中心に考えますから、自分が病気にかかったと思うんですが、実は素直に考えると違うでしょう。皆さん方の病気は家族全体の病気ですよ。解剖やっていたからわかっているつもりです。献体、生きている間に書類をつくってご本人の承諾をえるのは、もとよりですが、必ず家族の判子を押してもらうんですよ、亡くなる前に。それで100%献体されるかということ、そうはいきません。生きている間に仲の悪かった親戚なんかに当然、口をかけていません。ところが亡くなった途端にきて、「解剖なんかとんでもない」といって不献体になる。この率が大体、東京ですと10%になる。1割の方はだめですから。そういう方まで含めて、皆さん方の病気、最期の死というのは「自分のもの」ではないんですね、必ずしも。でも多くの方が、それを「自分のもの」と思っておられませんか。暗黙のうちですが。私は「病気は家族のものだと思いなさい」と今はいうようにしています。困りますでしょう。現役で働く人だと奥さんが相当なショックを受けます。50代の自殺が多いといいましたが、特にそうですね。50代は家族もある、奥さんもいる、お子さんもいる。友人とか知り合いもいて、その年代までの間に。その人たちがどう思うかを今の人は考えないでいいようになってしまった。うっとうしいから田舎から出るというのは、そうですね、考えてみれば。昔の人はそのうっとうしさに、どう耐えていたのか。

私は鎌倉生まれで鎌倉で育ってまして、鎌倉は旧鎌倉と市内は山に囲まれた人口5万の小さな町です。周りが大きくなって現在17万ありますけど、旧市内は昔と同じで、人口も変わっていません。うっとうしいはずですね。どういう時にありがたいのか。市内で母の家を地主さんがお寺ですから売ったというか、返した。自分の代になって新しいところに家を買った。お寺さんの借地ですが。その時にしみじみ思いました。東京で家を買うといういろいろ調べないといけない。知り合いのツテを探す。親の代から住んでいる土地ですと、一切そういう心配いりません。不動産屋さんも親の代から知っています。子どもも知っている。向こうも知っています。近所の人も知っています。うちのところは小さな谷になってましてトンネルを抜けないと入れない。その中に13軒の家があるんですけど、そのうちの一軒。残りの12軒が、へんな人がくると困る。夜中まで騒いでいたら困る。そういう時に楽なんですね。価格の設定も常識の範囲で収まります。なるほどなと思ったんです。今の人はそれを全部、保険に変えているなど。お金に変えているんですね。「いざという時に困りません」というのが保険ですから。昔は保険会社がなかったから、昔はそういうつきあいでやってきた。有吉佐和子さんの『紀ノ川』を読んだ時に、「坊主殺すと7代崇る」と。関

東では「火元は6代崇る」といいますね。火事出すと皆が迷惑ですから6代くらい覚えている。代替わりしていても。うっとうしいといえば、うっとうしいけれども、保証があるという意味では保証があるという世界です。これからの若い人がどっちをとるか。上手な落ち着きどころがあるんだろうなと。

現代社会で、そもそも気になっている点の一つでありまして。古い形と新しい形をよくわかって折り合わせないといけないんだろうなと思うんですね。安定した時代になっていくことはほぼ予想がつきますから極端に動かない。急に景気がよくなることもないでしょう、急に悪くなることもない。そういう時にはある程度昔風のものが生き残ってくるのではないかと無責任に思っています。自分中心の考え方、日本は実はそうなっていない、なぜか。たとえばグローバル基準ですね。教育も極端な話が英語でやれという話になる。会社は英語だけしかしゃべらない。グローバル社会はそれでいいが、他方、経済の中で7割を占めるローカルの世界がある。朝日なんて日本中で新聞売って外国で儲けてないでしょうと。にもかかわらず、しばしばグローバル基準をとりますね。経済記事を書く時、それは自分の足元をよく見ていない、日本で9割以上を稼ぎ出しているなら9割はローカルですね。朝日新聞が国際的な新聞だとは誰も思っていない。飛行機に乗るといろんな新聞くれますけど、英文朝日とかくれません。ローカルじゃないですか。皆さん方も頭の中はグローバルになっているが、やっていることはローカル。ねじくれていますから、こける可能性がある。それはどっちがいいとか悪いとかではなく、わかっていればいい、意識していればいい。ローカルとグローバルが共同したらいいものができるはずだと。さっき、グローバルの軸とローカルの軸は直交しているように描きました。これは夫婦でいうと、わかりやすい。ある時、事件があって治まって、夜、女房と差し向かいで座ってお茶を入れてくれて、何といったか。私にしみじみ「あんたは本当に人を見る目がないんだから」。私も女房の顔を見て「ほんとにそうだね」と。おわかりでしょう。女房は他人の話をしている。他人を見る目。私は目の前の本人の話をしている。両者全く一致していない。一点だけ一致している。人を見る目がない。ところが、このメリットはどこか。外から見れば夫婦は一体ですから夫婦で行動することは合同になりますから、合力にすると直交している時がベクトルが一番大きい。極端な夫婦が180度反対に向いている。足して0になる、喧嘩ばかりして外からみれば何の役にも立っていない。完全に重なって仲がいい、長い方だけにあればいい。どっちか、いらぬよということですね。両方ないといけないんですね。それをうまく合力をつくるのが大事です。

伝統的にみていきますと、日本人は「自分」ということをあまりいわない文化であります。というより逆だと思っと思っています、欧米の「自分」というものを立てる文化は例外的だったんだと思います。へんな文化ですね。欧米でも歴史をたどりますとローマでは「自分」が立っていません。どうみても。どしてわかるか。ことば、ラテン語、「我思う故に我あり」というデカルトの有名なセリフ、フランス語で書くのとラテン語で書くのがある。ラテン語で書くと3語になります。「コギト・エルゴ・スム」。私は考えるという動詞の一人称単数現在です。スムはamです。どうしてこれでいいか。コギトとかスムの主題はIに決まっているからです。英語でも教わった時に、へそ曲がりの子どもがいて「amはIにしかつかないんですね。だったらIはいらないでしょう。こう書いたら間違いですか?」と。間違いじゃないでしょう。わかるんだから。言語はそうなんです。フランス語も動詞の変化を、いやというほど勉強します。一人称、二人称、三人称、複数、単数全部、なんで動詞を変化させるのか。人称代名詞がなくても、それだけいえばわるわけですね。コギト、しかも省略しないできちんと書くのがアメリカ人、好きかという、とんでもなくてTPPとかWHOとかいくらかでもあるじゃないですか。アメリカ人にあったらいってくれ。「あんなに略語好きなんだからそろそろIは省略したらどうですか?」。問題はラテン語はこうなるの、いつから人称代名詞をいちいちいうようになったか。これは面白いと思うんです。よくわからないんですね。一橋の学長をされた阿部勤也先生、亡くなられましたが、阿部さんは中世のドイツ史の専門ですから書いたものを読んでみますと、11世紀に教会が告解、懺悔という習慣を打ち立てて奨励した。日曜ごとに教会にいて、この一週間、私はこういう悪いことをしたから神様に赦しを乞う。これが習慣的に広がったから自分を強く意識するようになってた。皆さん方にやってもらうと、自分の懺悔ではなく「あいつにいじめられた」と神様に言いつけるんじゃないですか。どっちかという。ところが教会では逆に「自分」がどうしたと、それから相当、自意識過剰になったのではないかという話です。それだけではないでしょうけど。

主語を立てるということが、ヨーロッパの文明が世界中に広がっていった大きな理由の一つだろうと疑うようになります。一神教の信者が世界の7割といわれています。日本は違います。一神教はほとんど広がりません。信者は古くからいるわけですが、隠れキリシタンまで含めたら。数%から1割いきません。理由があるだろうと。この考え方は一体何か。耳慣れないですが、「主体」と日本でいわれるものだと思います。僕が外国人の家にいて割

合、きれいな習慣がある。何か。「お茶にしますか、コーヒーにしますか?」。日本の家に行くとき黙って飲み頃のお茶と羊羹が出てくる。いちいち聞きません。「なんで聞くんだろう?」と不思議に思ったことはありません。「都合のいい方を入れてください」。都合のいい方というのを英語で、うまくいえないので困ります。いやなんです。客に負担をかけるんじゃないかと。ある時、なるほどと思ったことがある。子どもが誕生日のプレゼントに乳母車のようなものを、3、4歳の子どもがもらっているんですよ。色が塗ってない。あげた大人が周りにいて何をいつているか。「この車の色を決めるのはお前だよ」と。メタメッセージですよ。「人間界に起こる出来事には必ず主体があって、それが決めている。他人の家を訪問すれば、その段階でお茶を飲むか、コーヒーを飲むか、それはあなたが決める。具体的にはあなたが決めるんですか、もう少し抽象化すると、状況は変化が起こるわけですから、変化を起こした主体がいる。それを選択した主体がありますよ」と暗黙に伝えているわけです。小さい子どもでも「この車はもらいものだけど、その色を決めるのはお前だよ。そこには色を決める主体が存在するんだよ」、これが彼らの「自分」でしょ。これは日本にはありません。はっきりいって。

原発事故もそうですし、戦争責任の議論が起こりますけども、ドイツはきちんと責任を果たしているが、日本は果たしてないということをしている人がいます。開戦がどうやって決まったかという、御前会議で決まった。出席者一人ひとり聞くと「私は本当は反対だったんだけど」という話になる。これは非論理的ではないかと。誰も責任をとってない。みな、黙っている。山本七平さんはわかりやすく書いていまして、問い詰めて聞くと「いや、あの時に空気では、ああいうしか仕方がなかった」。空気の支配をとって『空気の研究』を書かれましたが、山本さんはキリスト教の考え方に詳しい方だからで、おそらく彼の頭の中には「主体」の存在があったと思います。「神」です。典型には。私は日本人です、根っからの。私にはそれがありません。戦争責任でいえば「なんであんなことになったのか、何が悪いか。ヒトラーが悪い」と。そこには「ある主体が存在するという物語」が存在している。それを共有しているとお互いに了解しやすいでしょう。「あいつのせいだ」といえますから。我々はそれをもっていない。だからみなで集まって決めるんです。その場の雰囲気決めていきますから、その時の状況で判断する。普通にいえば。その時の状況が、未来になって遡って「あの時」を考えた時、全部説明し尽くせるようなものではありませんね。「その場の空気」という話になるわけで。御前会議に出ている人も、その朝、奥さんが機嫌が悪くて、ご飯食べてこなかったとか、事情が個々にある。全部総合したものが結論になって出てくるのが日本であって、それは客観的でないかという、逆に極めて客観的かもしれないですね。状況に依存しているんですから。すべて入っています、無意識から意識まで。欧米型の文化だと一つの物語に替えて「誰がそれを選択したか」となります。それが存在するには「主体が存在する」ということを小さい時から徹底的に叩き込まないといけませんから、現代欧米の言語は、すべて「主語」が必要になる。「主語のない文章は文章でない」という教育になったんですよ。スペイン語をおやりになると時々「主語」が省略されていることにお気づきになると思います。だっていらぬですもん、自分は。あれだけ動詞が変化するから、きちんとわかる。わざとやっている。強調構文になっている。

カナダのモントリオール大学で15年、日本語を教えておられた教授の話を知ることがありますが、「主語がないと文章にならないといわれる言語は現代世界で7つくらいしかない。それはすべてヨーロッパの言語だ」といっていました。そっちの方が特殊なんだろうと。「主体」を立てる文化は戦争責任とか。具体的にものをやる時に極めてわかりやすい物語がつけれるのでしょうかね。「それを決めるのはあなたですよ」と。日本は、これをやっていません。会社でも日本では誰かが一人で決めたらクレームが起こります。会議だって一人欠けても大変なのはおわかりですよ。俺、聞いてない」というのは厄介ですから、後で。極めて民主的に動いている、日本は。それを外国人に説明するのが「面倒くさい」という。「我々はこういうルールでやっている」と、意識しないでやってきました。わかりやすいでしょう、「主体」が存在する論理は。「誰が悪い」といえるんです。実は「物語」だと私は思っています。「ヒトラーが悪い」といったってヒトラーを支持した人は誰か。ドイツ国民に決まっているわけですから。誰も「俺に責任がない」とはいえない。「物語」を共有していないと、かなり厄介なことになる。それが文化の違いですね。

アジアでは、そういう物語がヨーロッパほど共有されていない。なぜなら宗教が同じではないから。韓国の場合はキリスト教といわれていますが、よくわかりません。中国ですとタテマエは共産主義ですが、仏教は死んじゃっていますし、どういう論理を社会としてとっているのかは外から見えない。日本もおそらく外国から見れば「どういうことをやっているんだ、あいつらは」と考えるかもしれない。アトキンソンさんは、日本の会社を診断してきましたから、どこが悪いということを一言いうんです。日本が変えないといけない時に変えられない理由とし

